

感染拡大抑制への社会的課題

～相互隔離を「しっかり治す」ために～

シンキング・バーズ
歴史科学研究班

公衆衛生モデルと モラル変容の狭間で

か つて感染症は、「不衛生」が一つの要因になって拡大しました。ネズミからノミを介してヒトに感染したとされるペストは、ヒトの居住空間にネズミとノミがいる生活環境によって、家庭内感染から都市内感染、さらに他地域への感染と拡大し、「ペスト禍」に至ったと言われています。スペインの中南米侵攻で蔓延したとされる天然痘などの感染症は、衛生状態の悪い生活環境が、その拡大を助長したと考えられています。

そのため、近代医学の発達に伴って重要視されるようになったのが、治療以前の課題としての公衆衛生でした。飲料水の浄水や下水処理、生ゴミの焼却処分、糞尿の処分場処理などのほか、生鮮品を中心とした食品衛生の考え方が、広く普及するようになりました。日本における本格的な衛生環境の整備は、戦後になってから進んだと言えますが、結果として赤痢やコレラなどの細菌型感染症は、激減して行きました。

しかし、ウイルス型感染症は、細菌型の公衆衛生レベルで防ぎ切ることはできません。冬場に流行するインフルエンザも、日頃から衛生管理に努めていたとしても、り患することがある感染症です。新型コロナウイルス（COVID-19）の場合は、衛生環

境水準が高いとされる先進国でも感染拡大を見えています。それは、「不衛生」だからではなく、従来型の公衆衛生モデルが通用しない感染症だからです。



●「自然」から隔離し合う社会

こ の感染症から身を守るためには、生活空間を空調設備などで滅菌状態にし、防護服姿で日常生活を送るのが効果的なのでしょう。しかし、あらゆる生活空間を滅菌室並みの衛生水準に引き上げ、常時防護服姿で暮らすなど、現実問題として不可能です。そのため、いわゆる「3密」を避けるため、ソーシャル・ディスタンス（相互隔離）が唱えられたのでしょう。

ヒトとヒトがお互いに隔離し合う意識上の行動変容は、専門知識を持たないヒト同士の社会的な相互不信を、増幅する結果を招いている側面があります。県外ナンバーの車に対する根拠のない警戒感や違和感、店舗などでマスク未着用のヒトに対する不信感など、ボク自身にそういう気持ちがないと言えば嘘になります。それぞれの個人の事情などお構いなしに、一括りにして「感染予防の意識が薄い」というレッテルを貼る感情が、直感的に芽生えてしまうのです。それは、医学的認識とは別のレベルの社会学的問題と言えます。

ヒトと「自然」の関係は、以前の論考で

も考察したように、ヒト自身に備わった「内なる自然」とヒトを取り巻く外部環境としての「外なる自然」とで成り立っています。ヒトは、「外なる自然」の恩恵で生存できる生き物ですが、その脅威にさらされるリスクを同時に背負っています。「自然」とは、時に優しく、美しく、壮大で、時に残酷な一面を見せる環境空間です。

その「自然」の脅威から可能な限り遠ざかるためには、リスクを伴う「自然」との接触機会を少なくするしかありません。「自然」に働き掛けることで成り立つ農業や漁業、鉱業のような「現場」から離れ、デスクワークで生計が維持できるならば、脅威としての「自然」からのリスクを、軽減できる可能性が増します。また、自然災害の頻度が高く、防災体制が脆弱な地域に暮らすよりは、その備えが整っているとされる地域に暮らす方が、被災のリスクは軽減できるかもしれません。ヒトは、内心では「自然」と直接触れ合うことに恐れを抱いて、「自然」から逃れたい本能を宿しているのかもしれませんが。しかし、それはあくまで個人レベルの問題です。どこかで誰かが、食糧生産や鉱物資源の採掘に携わっているから、その選択が可能なのです。また、自然災害のリスクは、どこにでもあります。

ボクたち人類は、「自然」から隔絶した場所では生存できないにもかかわらず、「自然」からの隔絶を自ら望むことで、身の安全を図ろうとする矛盾した心性を持っています。

●ヒトがヒトに抱く感情について

ボクたちは、ヒトとヒトの関係性で成り立つ集団のことを、「社会」と呼んでいます。「社会」は、一定の規範や倫理観などを共有する人々の集まりを指すことばです。血族などの同族集団を指す「共同体」とのちがいは、

「社会」の方が、個人を重視する傾向が強く、多様性の裾野が広いと言えます。

その「社会」を構成する個人は、ヒトが動物に属する生き物である以上、「自然」の一部です。つまり、ある個人から見た別の個人は、人類という共通項を持ちながら、「外なる自然」の一個体と認識された存在と言えます。他者とは「外なる自然」の一部である、という認識法です。その時の他者は、ある個人から見て、恩恵と脅威の二面性を持つ「自然」なのかもしれません。

ヒトが動物に属する生き物である以上、ヒトは動物の一種という認識法を、まちがいとすることはできません。しかし、動物としての他者に抱く感情が、不安や不信、時には恐怖だとしたら、他者の存在は、ケモノ同然の生き物という認識になる可能性があります。それは、通常の世界環境下でもあり得ることで、パンデミックは、それらの負の感情を増幅する結果を招いている側面があります。

県外ナンバーの車を故意に傷つけたり、帰省者を言われなく中傷する行為は、恐らく犯罪です。陽性確認者への差別や偏見を煽る行為も、恐らく同様です。逆に、感染予防に余りに無頓着と思える行動は、犯罪ではないとしても、モラルの欠落と非難される余地は持っています。

ボクたちは、ヒトとヒトが根拠もなくお互いに隔離し合う不自然な「社会」は、できるだけ早期に解消されることが望ましいと考えています。しかし、そのための科学的な裏付けは不可欠です。特に今冬に懸念されている感染拡大の大きな波に対しては、最悪の事態を想定しておく必要があると考えます。その想定下で、ヒトとヒトの信頼関係をどのように担保して行くのか、「社会」に投げ掛けられた課題は、決して小さくはありません。

●「しっかり治す」を心掛けよう

新 型コロナウイルス感染症が社会問題化している要因には、いくつかの要素があります。

① ウイルス特性について

1. 未知のウイルスである
2. 日常の中で可視化できない
3. 感染力が強い

② 感染症状について

1. 無症状から死亡まで多様
2. 死亡率はインフルエンザより高い
3. 重度の肺炎で死亡する例が多い
4. 無症状者や軽症者が感染を広げる

③ 医療について

1. 感染の判定に時間と費用が掛かる
2. 検査体制の拡充には限界がある
3. 根本的な治療法がまだない
4. 重傷者の受入れ体制に限界がある
5. 医療スタッフへの負担が大きい

④ 感染リスク回避について

1. 「3密」を避ける
2. 日常的な手洗いの励行
3. 外出時のマスク着用
4. 外食等は避ける
5. 他地域との交流を避ける

⑤ 陰性と陽性について

1. 潜在的陽性者への警戒感
2. 発熱症状＝陽性という誤解
3. 陰性者の陽性者への偏見
4. 社会活動上のモラルの変質
5. 経済活動への影響

上記の要素は主なものです。①～③は、医療体制を含む医学的な要素と言えます。④～⑤は、医学的な視点も含みますが、社会全体の行動様式やヒトがヒトを見る時の思考パターンのような、変容を強いられている社会的な要素です。ボクたちの視点は、医学的な要素も社会的な要素の一部という捉え方ですが、いずれにしても、現状の打

開には、医学的知見の裏付けが必要です。

ボクたちは、新型コロナウイルスの感染拡大が、疾患とは異なる領域で、社会的病理を助長することを懸念しています。社会的病理とは、⑤に挙げたような項目です。PCR検査で判定される「陰性(negative)」と「陽性(positive)」は、医学的にはウイルス非保持(精度は完全ではないとされる)と保持を識別(identify)したものです。しかし、その識別が持つ社会的意味が、ヒトとヒトの分断を助長し、社会自体を病ませてしまっては、身も蓋もありません。

感染症に対する社会的モラルは、例えばインフルエンザの場合、かつては「単なる風邪」と認識される傾向が強かったと言えます。多少の発熱があっても「風邪くらいで休むな」と言う職場があって、そう言いながら「みんなに風邪をうつすなよ」と矛盾したことを言う風潮が、まかり通っていた時代がありました。り患した側も、「風邪くらいでは休めない」と思ったりしました。

この感染症の場合も、一部の国の指導者が同様の発言をしたことがありました。世界的な流行は、波状的な揺り返しがあったとしても、いずれは収束の方向に向かうという予断が下支えにあると言えます。しかし、収束の時期がいつになるのか、また、いずれは収束するという見通しが果たして正しいのかは、誰にも予断ができません。

感染拡大の抑制には、「しっかり休んで風邪を治してから入社する」が、最も妥当な行動です。その共通認識を組織が持つことで、組織として社会的モラルが向上したと言えるのです。「禍」と認識されている社会的病いは、ある意味ではヒトの心の病いです。「社会」が「禍」にどう向き合うのかというモラルの形成は、「しっかり治す」を心掛けることに尽きるとボクたちは考えます。

(2020年8月21日)

シンキング・バース新書

近代文明への問い
感染拡大抑制への社会的課題

2020年8月21日（初版）発行

著者：シンキング・バース
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。